超高齢社会　―信仰とその取り組み―

おやさと研究所所長
高見　宇造　*Uzo Takami*

はじめに

超高齢化社会と言われる現代社会をどのように受け止め、何を発信していくかが大きな関心事になる。では先人はどのように考え取り組んできたのか、その歩みを明らかにすることがまず大切である。そこで資料として『天理時報』を取り上げ、戦後から現代まで 10 年間隔で主な言説、取り組みを考察した。日本の高齢化率は、2005 年以降、3 年連続で世界最高となっている。ちなみに高齢化を表す指標の一つ「高齢化率」では、21％以上を「超高齢化社会」と呼んでいる。

積極的な提言

本教と高齢社会の取り組みは、戦後間もなく高齢者福祉施設の開設（昭和 23 年 7 月 4 日号）に着手するなど、その意味では早くから関心を持って取り組んできたと言える。以後、本教の歩みは「内に親子･兄弟･夫婦という深い血縁的なつながりの、より強い結び付きを、その教えで強調しながら、外に向かってはようぼく、信者一人ひとりが、ひのきしんの態度で世の老人達に接し、物心両面にわたる対社会的活動を推進」（昭和 46 年 9 月 12 日号）してきたと言うことができる。教内に対しても積極的な提言を行ってきた。「親神様の御教えを、弘める事こそ、最大の所謂、『社会保障』といえよう」（昭和 28 年 12 月 27 日号）、「老人の幸せのために尽くすことが、すなわち子供の幸せの種であるということにもなる。してみれば老人問題の解決のヒントはすでに教えられているわけである」（昭和 55 年 3 月 9 日号）、「人間の生と死、生きる目的、自然との関わりなど、根源的な問題に答える人間観はやはり『天の理』の教えによるしかない」（昭和 60 年 6 月 2 日号）など早くからの提言が窺える。

「親孝行」

またそれに付随して「親孝行」についても様々な意見と変遷があった。「なぜ親孝行か」という相談には「人類の親である教祖に対して、その子供である私達が孝行することこそ真実の孝行であり報恩であると信じております。…その紙一重の悟りを誤ると、ただ肉親の愛情だけにひかれて、更に救済せねばならぬ他人を全く顧みない心こそ『かわいい』という愛欲のほこりを積む」と本論を述べた上で、「親の生命の長からんと願うことは、あなたの生命の長からんことを願うことと、全く一つであります」（昭和 44 年 7 月 20 日号）と答えている。

また「単に子からの孝行のみを求める形ではなく、相互に求め合い思い合って共に成人をなしていくものと教えられる。…子供の養育は最もたしかな老後保障という考え方である。これは所有物視の一つの型として戒めねばなるまい」（昭和 46 年 9 月 12 日号）、「人間の親孝行は文化の出発点である。それをないがしろにして文化は進展しない」（昭和 61 年 3 月 23 日号）などがある。最近では「身近にいるお年寄りを自分の親と同じように考えて援助することだ。つまり、地域における世代間のたすけあいによって、間接的に親の恩を返していく道である。これは、『親孝行の社会化』とも言えるだろう」（平成 20 年 3 月 9 日号）という現代社会を踏まえての提言もある。これは大変興味深い。

人材育成

その一方で、具体的な取り組みとして、早くからホームヘルパー（家庭奉仕員）養成の提言を行っている。老人家庭の世話取りについて、「ここにこそ、教祖に導かれる『道の者の大きな働き場』があると言えるのではあるまいか。……老人家庭の問題は、『新しいひのきしんの場』として、真剣に取り組むべきである」（昭和 47 年 9 月 10 日号）、「社会の目立たぬところで、地味ではあるが大切な活動を続ける人達こそ、真に『おたすけ人』といえるのではなかろうか」（昭和 48 年 3 月 4 日号）と述べ、更に地域活動との連携を模索している。こうしたなか、「高齢者へのひのきしんとおたすけ」のために、「ひのきしんスクール」が開設になった。「老人介護コース」、「ヘルパー養成講習会（3 級課程）（2 級課程）養成講習会」が開催」（昭和 55 年 10 月 5 日号）された。「老人介護課程」は 4,217 名、「ホームヘルパー（3 級課程）養成講習会」は 2,692 名、「同（2 級課程）養成講習会」は 528 名がそれぞれ修了している。平成 12 年の介護保険制定後は、天理高校に介護福祉科が開設、また「道のヘルパーの会」が結成されるなど人材の育成とその受け皿づくりが進められた。

高齢者介護

介護の問題は老老介護など深刻な現実を孕んでいるが、介護現場からの意見として「たとえ寝たきりであっても、意識がなくとも、生きてある命には意味がある。精一杯に介護をされる家族の姿に接するたびに、その思いをかみしめている」（平成 14 年 9 月 15 日号）という意見がある。これは介護を通しての信仰的成人という視点から興味深い。ところで「介護にまつわる諸問題によって、長寿が必ずしも幸福とはいえないという気分も拡がりつつあるようだ。日一日と高齢化が進む社会で、私たちようぼくはこの現状をどのように受け止め、諸問題にどう向き合えばいいのか」（平成 20 年 3 月 9 日号）と言われる今日、こうした世の中の閉塞感を打破するのは「115 歳定命」の教えである。「信仰的には、世の人々の心のありようが、親神様の思召に少しずつ近づいている兆しだと明るく受けとめたい」（平成 27 年 10 月 18 日号）という思案である。これが何よりも求められるところであろう。

最後に

「教祖 130 年祭おたすけ推進大会」の席上、上田嘉太郎表統領（当時）は『天理時報』手配り活動の進化を強調した。「高齢の購読者への手配り時の声かけは、それ自体が見守り活動になっている。そうした動きが広がっていけば、たすけを必要としている人たちを、ようぼく同士でサポートする活動へと進んでいく」（平成 26 年 6 月 22 日号）と述べている。また布教部社会福祉課では「手助けを必要とする人や援助者に関する情報を地域ごとに記す『支え合いマップ』」（平成 26 年 2 月 16 日号）、「患者の感情に直接アプローチし、本人に尊厳と共感をもって接することで、心を通わせるコミュニケーション法、認知症介護スキル『バリデーション』」（平成 26 年 9 月 7 日号）の啓発に取り組むなど、現在新たな流れが展開しつつある。